# Ｐ＆Ｐ（改訂版）

木戸・山茶花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｐ＆Ｐ（改訂版）

【Ｎコード】
Ｎ６１８２Ｙ

【作者名】
木戸・山茶花

【あらすじ】
レリクスという特殊な塔によって人類に特殊な能力が目覚めて一世紀。
能力の悪用を防ぐため、個人能力対策省に勤める武藤力也と東郷レナが奮闘する。

# 第一話　1

満天の星空を眺めながら、武藤力也は細く長い息を吐いた。
十月も終わり、そろそろ冷えてくる頃だけあって、息はわずかに白い。つかめそうとまではいかないが、寒さを感じさせてくれる。
力也は襟元を閉めながら、のんびりと星を見上げていた。趣味ではない。単に、視線のやりどころがないだけだ。
夜は九時、ビルの屋上から少しのぞけば、ネオンきらびやかな大通りが見える。人ごみは大きく、まだまだ街は元気そうだ。
結構なことだ、と意味もなく思いながら、力也は相方を見る。相方の少女は、空にも地面にも興味がないようで、携帯電話をいじっていた。おそらく、ゲームでもやっているのだろう。
長い金髪に、静かな碧眼。場所が場所なら妖精然とした美しさを感じさせる容貌だが、ビル群の屋上とあっては、その美しさも半減だ。
「なに？」
相方、東郷レナがこちらの視線に気づいた。力也は、なんでもない、と手を振って返す。
「そ」
レナは淡々としたものだった。何事にも興味を持たない相方らしい態度に、力也は一種の安心を感じる。
仕事前でも変わらぬ態度というのは、心強い。力也など、先ほどから連絡を心待ちにしているというのに。
力也は、手に熱い呼気を乗せ、それから思い出し、ズボンのポケットから手袋を取り出した。
手袋といっても、防寒用ではない。防弾・防刃繊維で編まれた特殊な代物だ。寒さ対策にはならないが、お守り代わりにと、予めはめておく。
連絡は、力也が手袋をはめてから数分できた。力也とレナ、二人

の携帯電話が同時に鳴った。
電話に出たのは力也だった。レナは、まだゲームをやっている。
「武藤です」
『東郷だ』
声は、酷く重苦しく、緊張感漂っていた。相手の顔を知らなければ、声だけで威圧されそうである。
『目標を発見した。すぐに確保してくれ。場所は、君たちがいるビルから東に二本目の通り。歩行速度で南下中だ』
「了解です」
『目標の能力は確認しているな？』
「えぇ。えっと、火を出せるんでしたよね」
『正確には、任意の空間に着火する、だ。程度はそれほどでもないが、厄介な能力だ。近辺に被害を及ぼさぬよう、注意してくれ』
「了解っす。こっちの能力の使用限定はあります？」
「今から十分だ。シグナルを送るので、電話を首に当てたまえ」
言われるがまま、携帯電話を首に当てる。レナにも指示し、二人で同じ動作をとった。
首、言われて電話を当てるのは、透明な首輪だった。力也にも、レナにもはめられている。二人は疑問を感じることもなく、電話相手に従った。
受話口から、微かな高音が聞こえた。聴力検査で聞くような、単一の音波だ。
音波を受け、首輪が微かに光る。力也は首輪を指で弾き、効果を確認するように拳を握る。
「オーケー、いけます」
再び電話を取り、答えると、電話の主は、頼む、とだけ言って電話を切った。
仕事の始まりだ。力也はレナと視線を交わし、
「行くぞ」
と、手を差し伸べた。

途端、レナが嫌そうな顔をする。美人顔を不快にゆがめ、
「また？」
そう聞いてきた。
「そっちの方が早いだろ。こっから階段下りるのも面倒だしよ」
「だから、下で待ってればよかったのに」
「人込みウザイって言ってたの、誰だよ」
決着はすぐについた。レナはしぶしぶ、と言いたげに、力也に身を寄せる。
力也は、レナの背を支え、膝をすくい上げる。いわゆるお姫様だっこだが、二人の間に甘い感情は無い。
ただ、これからなす仕事の苦さだけを考え、
「行くぞ」
「ん」
告げると、力也は走った。
三十メートルを二歩で駆け、跳躍。二十メートルの大通りを軽く飛び越えた。さらに、向かいのビルの屋上を一歩で通り過ぎ、宙に飛び出す。
目標はすぐに確認できた。明らかに浮いている人影、何かを警戒するように、おそらくは自分たちだろうが、辺りを見回しながら、早歩きに進んでいた。
「いた」
レナも目標を確認したらしい。力也は、ビルの壁を蹴り、着地点を調整しつつ、叫んだ。
「個能省（このうしょう）だ！　そこの違法能力者、動くんじゃねぇ！」
叫ぶと同時、人々がざわめき、一斉に上を向く。力也たちを見るや否や、誰も彼もが逃げ出した。
目標、冴えない男も同じように逃げ始めた。しかし、すでに目標を定めた力也たちには意味が無い。
力也は、着地するとレナを下ろし、跳び出した。常人ならば十秒はかかる距離を、またも二歩で埋める。

男の肩を捕まえ、振り向かせると同時に、地に引き倒した。
「動くなよ、犯罪者」
「ひいっ！」
男の顔が引きつる。それに合わせるように、力也の目の前に、どこからともなく炎が現われた。
「ちっ」
舌打一つ。顔を上げ、よける。炎は一瞬で消え、しかし、男は力也の手を離れてしまった。
慌てふためき、もがくように男は逃げ出そうとする。それでも、力也は焦るつもりもない。一般人程度の身体能力では、力也からは逃げられない。
「逃げんじゃ……」
跳び、
「ねぇっ！」
容赦なく、男の足を蹴り、払う。向かって右からの一撃は、男の右足を曲がらぬ方向へ曲げて見せた。
「ぐぎゃっ！？」
男の抵抗など、まるで気にせずに、力也はポケットから、一枚の、白いプレートを取り出した。それを、男の腕へとあてがう。
すると、プレートは粘土のように姿を変え、蛇のように男の腕に巻きついた。
「い、いてぇ、いてぇ。た、たすけ……」
「助けて欲しけりゃ、ハナっから抵抗すんな。当然の報いだ、ボケが」
髪をかき上げつつ、熱い吐息を一つ。それを終了の合図として、力也は強張っていた体から、力を抜いた。
「レナ」
「んー」
よろよろと、気持ち悪そうにしている相棒に一声かける。
「……大丈夫か、お前」

「気持ち悪い」
「おいおい」
「あれ、嫌いだって言ってる」
「一応、今回は気をつけたつもりなんだけどな」
連絡を入れて欲しかったのだが、本気で青い顔をしている相方に無理強いはできない。力也はため息を吐きつつ、自分で携帯電話を取り出した。
リダイヤル。コール音一つで、相手は出た。
『東郷だ』
「武藤です。目標の確保、完了しました」
『ご苦労。被害は』
「俺の前髪が少しだけです」
『了解した。回収班をまわす、それまで、目標の確保を頼む』
「アイサー」
もはや立ち上がれぬ男を椅子にして、力也は座り込んだ。レナはまだふらついている。自分では手加減したつもりだったのだが、レナにはあのアクロバットは耐えがたかったらしい。
次はもう少し穏やかにやろう、そう考えつつ、力也は再び空を見上げた。
ネオンに照らされながらも、星は微かに輝いている。が、はかない星々の光を遮るように、一本の白い塔が夜空を割っていた。
レリクス。力也が生まれるよりもずっと昔より生えている塔。
今の自分たちを作り上げた、そんな塔。
いつしか、力也の視線は星を離れ、レリクスへと注がれていた。

# 第一話　2

冬の早朝は暗く、寒い。当然のことに苛立ちながら、刑事は後輩からの報告を聞いていた。

「被害者は、男のようですね。免許証がありました。キムラ・カツノリだそうで」

「んで？」

「死因は出血多量かショック死か、判断つきかねてるそうです。みじん切りにされた場合、死因はどうなるのか。鑑識自身が教えて欲しいそうで」

「んで？」

「第一発見者は、近所の高校に通う女生徒です。部活のため、朝早く出かけたところ、ホトケさんを見つけてしまったそうで」

「んで？」

「今は、署で状況を聞いています。っても、何がどれだけわかるか分かりませんが」

「んで」

「個人能力対策省（こじんのうりょくたいさくしょう）から、案件引継ぎの連絡が来ています。耳が早いですね、奴ら」

「そうかい」

刑事は大きく息を吐いた。白い。つかめそうだが、娘から口臭を指摘されている。若い刑事は、手で払いのけていた。

「このやろう」

「自覚症状あるんだから、こっちに向けないで下さいよ」

「けっ。それで、バラされたのはいつごろだ？」

「昨晩の一時からあ三時にかけての間、だそうです。ただ、結構じっくりやってたみたいで、下手するとついさっきまでかかってたのかもしれないそうで。とはいえ、川原で、土手ですからね。誰か通ったとしても、夜のうちじゃ見つけられなかったでしょう」

若い刑事の言うとおり、現場は足の長い草の生えた川原であった。すぐそばに土手はあるものの、暗いうちでは見つけにくいだろう。今でも目を凝らさねば、分かり辛い。見つけてしまった女生徒とやらは、よほど目が良かったのか。もしくは運が悪かったのか。

「文字通りバラバラですよね。破片拾うの、大変そうです」

「なら、手伝ってきたらどうだい」

「嫌ですよ。っていうか、下手に手を出したら、鑑識の連中にぶん殴られます。破片飛び散りまくってて、ただでさえいらついてるんですから、あいつら」

「個能省（このうしょう）から連絡が来てるってことは、また能力がらみかい」

刑事は、自分の腕をさすりながら、憎たらしげに言った。腕には、透明な腕輪がある。それは若い刑事にも、この現場にいる者全員にはまっている物だった。

「またいいとこ取りですか、奴ら」

若い刑事も、何やら思うところがあるらしく、先ほどから言葉の棘を隠していない。刑事は先輩として苦笑する。

「んじゃ、お前も申請だしてみたらどうだよ。個能省ってのは万年人手不足なんだろ？」

「出しました。それで、却下されました」

「なんでだよ」

「俺の能力は役に立たないそうです」

「あぁ、そりゃ良かったな。首輪付きになる可能性はないってこった」

「竹田さん……」

若い刑事、進藤の非難の視線を軽く受け流し、

「まぁ、俺もだ。二十年前にな」

進藤の視線の意味が、一気に反転した。

「すんません」

「ま、俺以外にもいる。気ぃつけとけ」

「うっす」

竹田は、やっと登ってきた太陽と、その隣にある塔を見上げる。
レリクス。二十世紀始め、一九〇一年に突如として現われ、世界を混乱に陥れた張本人。そして、未だ世界に禍根を残す、竹田としては忌々しい相手だ。
「進藤、お前、歴史の授業でならったか、あれ」
「は？　あぁ、レリクスですか？　習いましたよ。っていうか、習いますよ、最近の子供なら」
「信じられるかお前？　あんなのが、いきなり生えてきたって言われてよ」
進藤は肩をすくめる。
「信じられませんけど、真実なんでしょう」
「授業で教わるからか？」
「事実として、そこにあるからです。俺としては、あれが生えたのが、百年前でも千年前でもなんでもいいですよ」
「まぁなぁ」
「一九〇一年に突如として世界各所に現れ、人間に特殊な能力をもたらした奇跡の異物。第一次世界大戦は能力絶頂期で、世界人口が半分になり、ベルサイユ講和条約で戦争利用は禁止されたものの……」
「第二次世界大戦で劣勢に立たされた日本が、能力解禁しちまったんだよな？」
「えぇ。その責任を取るために、日本の個能省は人数制限が厳しくされ、未だに国連で常任理事国入りもできていません。って、それがなんですか？　歴史の授業なんて、竹田さんらしくもない」
「ふん。悪かったよ。どうせ俺は頭より足で稼ぐタイプさ」
「いえ、そこまでは言ってませんけど……」
言葉を濁す進藤の肩を叩き、竹田は歩き出した。進藤も付いてくる。向かうのはパトカーだ。
二人は乗り込み、周囲に適当な挨拶をしてから、車を走らせた。
「不幸な第一発見者はどうしろって？」

ハンドルを握る進藤に、竹田が聞く。進藤は視線を前に向けたまま答えた。
「個能省が引き取りに来るそうです。すぐに」
「すぐにかよ」
「あっちもあっちで、手一杯らしいですからね」
「ふん、人数制限されてるお陰でヤマも片付かねぇ。それで能力犯罪大国扱いかよ」
「それがまた人数制限の言い訳にされてる、って、どうなんですかね」
「しらねぇよ。それこそ、俺らのヤマじゃねぇや。上の連中が考えるこった」
「それを言ったらおしまいですよ」
二人は、ほどなくして、警察署についた。とりあえずは、第一発見者を見ておこうと思った竹田だったが、受付に見慣れぬ人影を見つけて、足を止めた。
学生服の、男女二人組みだった。
一人は、どこにでもいそうな少年。
一人は、フランス人形かと思うような美少女。
ちぐはぐな二人だ。どう考えても、朝早くから警察署に来るような人種ではない。だが、二人にはある共通点があった。
首に付いている、輪だ。
まさか、と考えるまでもなかった。竹田はすぐに答えを導き出し、進藤の肩を叩く。
すると、進藤も気がついたようで、顔をしかめた。
「狗(いぬ)っすね」
短く、進藤が告げた一言。それにあちらの二人も気が付いたようだ。婦警を置き、少年の方が話しかけてきた。
「おはよーございます。個能省のもんなんですが」
予想は的中。少年は個人能力対策省の武藤と名乗り、相方の少女は東郷だと紹介した。

「第一発見者の引き取りか」
「うっす。話、通ってますよね？」
「あぁ、ねじ込まれてるよ。ったく、俺らも一目拝見しておこうと思ってたところだったのにな」
「すみませんね。まぁ、手間が省けたとでも思ってもらえると助かります」
物怖じしない少年だ。二回りは歳が離れているであろう竹田にも、堂々と応じてくる。少女の方は、むしろ興味が無いようで、竹田も進藤も、どちらも見ていなかった。
進藤に案内をさせながら、竹田は武藤と名乗った少年と話しながら歩いた。
「お前みたいな子供がやってるとは、いよいよ個能省の人手不足も深刻らしいな」
「いっつも手が回りませんよ。おかげで、ご迷惑をおかけしているようで」
「ふん、お前さんらが持ってってくれるおかげで、俺らは暇でしょうがねぇ」
ははは、と武藤が頭をかいて苦笑した。本気で困っているようだ。大人との会話も慣れているのかと思ったが、意外とそうでもないらしい。
大人気なさを反省しつつ、竹田は助け舟を出してやる。
「ま、おかげでこんな商売してても、娘ともよく顔を会わせられる。てめぇらのおかげでな」
「そう言ってもらえると助かります」
第一発見者の女生徒は、署内のベンチに腰掛けていた。長い黒髪に、気弱そうな瞳だ。隣には、婦警がいる。色々と気を使ってやっていたのだろう。
あれだ、と進藤が指差すと、武藤は素直に腰を折った。東郷の方も頭だけだがペコリとお辞儀する。
武藤が何かしら話しかけると、女生徒は怯えて後ずさった。首輪

を見たからだろう。あの首輪は、警察手帳より破壊力がある。竹田も最初見た時は、不信感と不安感に苛まれたものだ。

先程の、拙い講義を思い出す。

世界人類に目覚めた特殊な能力は、結局、全人類の能力封印という形で決着した。が、当然のように、能力を悪用する者も現れてしまった。

そんな者たちに対抗するためにいるのが、個人能力対策省・対策官。通称、個能省の狗(いぬ)たちだ。首輪から付けられた蔑称である。

日本では、二十人しかいない。たったの二十人で、日本国六千万の人口を支えている。

竹田としては、同情しないでもない。血気盛んだった、若かりし頃の自分ならばともかく、今の自分で六千万の人口を支えろと言われれば音を上げるだろう。

武藤と女生徒の会話は、しばらく続いた。女生徒の方が、武藤たちを拒んでいるのだ。だが、武藤が自分の首輪を指差すと、女生徒は途端に大人しくなった。

「脅しっすね」

「言ってやるな」

進藤の嫌味を抑えつつ、竹田は武藤を見る。

よくよく見れば、自分の娘と、そう変わらない歳だ。高校の一年か二年といったところだろう。

それで個能省の対策官をやれるのは、幸か不幸か。娘が友達となにそれしたという話を思い出し、竹田は俯かずにはいられなかった。

きっと、友達だのなんだのといった、ごく一般的なことも、武藤と東郷の二人にはできないのだろう。それくらいの意味が、あの首輪にはある。

国家を超える意味すらあるのだ。あの学生服も、意味があるのかどうか。学校に通えているのすら疑問である。

女生徒が大人しくなると、武藤が外に出るよう促した。この時点で、竹田たちの仕事は終わりだ。武藤たちは、一礼して去っていく。

その背に、竹田は思わず声をかけた。
「よろしくたのむぜ」
と、嫌味なしに。進藤は意外そうな顔を見せ、そして振り返った武藤は、
「たのまれました」
と、嫌味のない笑顔で答えた。

# 第一話　3

警察署を出ると、力也は大きなため息をついた。なんとも肩がこっている。大人とのやり取りというのは、未だに慣れそうもない。

相棒、レナがいつも無気力なので、どうしても力也ばかりが前に出るハメになる。何度お願いしても態度を変えない相棒に社交性を求めるのは、もはや諦めた。

警察署の門を過ぎてから、大きく体を伸ばす。それでやっと、体がほぐれたような気がする。

改めて、力也は第一発見者である少女に向き直った。

どうやら同じ学校であるらしい。といっても、力也たちはほとんど通えていないが。

「えーっと、九条奈々子さん、でよかったよな」

「は、はい……」

奈々子は、力也たちの首輪を見てから、ずっと萎縮している。怖いのだろう。誰しもが、同じ反応を取るので、力也の方は慣れている。

レナは元々気にするたちではないので、こういう場合にフォローするのは、いつも力也だ。

「まぁ、俺たちは噛み付いたりしないから安心して。君の保護ってことで来てるしね」

なるべく軽い口調で言うと、奈々子は気がついたように尋ねてきた。

「保護、ですか？」

「そう、保護。第一発見者だし」

「で、でも、私は見つけただけで、犯人も見てないし……。その、腕輪も、ほら、ちゃんと」

そう言って袖をまくる細腕には、ちゃんと透明な腕輪、能力封じの証がある。しかし、力也は首を振り、

「君が犯人だなんて言ってないって。あれだよ、あれ。君が見てなくても、見られてた可能性があるからね」
「で、でも……」
「大丈夫大丈夫、皆勤賞狙いでもちゃんと、出席扱いになるように学校には言っとくから」
「そ、そうじゃなくてですね」
「つか、君、何年？」
「え？　二年ですけど……」
「だったら、俺らとタメじゃん。敬語じゃなくていいよ」
「じゃ、じゃあ、……って、そうじゃなくて！」
力也としては、奈々子が何を言いたいのか分かっている。誰しもが思うことだ。怖い。嫌だ。関わりたくない。そう、誰でも思う。
が、人材不足の日本・個人能力対策省は、手段を選ばない。否、選べない。手がかりがあるならば、それをフル活用して、犯人を縛り上げなければならない。
犯人を捜せるような能力の持ち主もいるが、生憎とそういう便利な能力持ちは、もっと複雑な事件の担当へとまわされる。悲しいかな、殺人程度、では動かせるものではない。
日本にはとことん余力が無いのだ。力也個人で話をしても、睡眠時間がほとんどない。昨日も仕事、今日も朝から仕事で、二時間寝たかどうか。
なので、多少ぐずる相手をエサとして連れて行くのにも、なんのためらいもない。
力也が奈々子をなだめている間も、レナが周囲を警戒している、はずである。はずというのは、レナの無気力感を今もひしひしと感じているからで、仕事してるかお前、とは奈々子の前では聞きづらい。
ひとしきり奈々子の文句を聞き終えた頃には、もう互いにタメ口になっていた。
「どうしても？」

「どうしても。一応俺ら、公務員だし。これ以上断られると、公務執行妨害とか言っちゃうし」
「ちょっ、そんな横暴よ！」
「まぁ、レアな体験だと思って、諦めてくれ！」
「そんなー！」
とりあえずこれで、奈々子は抵抗する気力をなくしたらしい。もういいや、と投げやりな視線をよこしてきた。
「いやぁ、スムーズに話し合いが終わったな！」
「どこがスムーズよ！」
ついでに奈々子はツッコミ体質らしい。力也がそれとなく話をずらそうとするたびに、流れを修正してきた。
「九条って、クラス委員長だったりする？」
「……だったら何よ？」
「いやぁ、ぴったりだなぁと」
「なにそれ」
クラスをまとめ、仕切っているのが似合いそうである。
問答が落ち着いたところで、力也は切り出した。これからのことを決めねばならない。
「とりあえず」
「とりあえず？」
「ゲーセンでもいく？」
「なんでよ！？」
奈々子のツッコミが、神速で返ってきた。
「いやぁ、他に行くとこないし」
「学校は！？」
「たまってる宿題終わってないからあんま行きたくないんだよね、そこ」
「やりなさいよ！？」
「いや、ほら、仕事イソガシイシー」
「目をそらしながら言うな！」

あっはっは、と笑って見せると、奈々子は思い切り肩を落とした。呆れているか疲れているか。おそらく後者だ。
「ま、警察署の前で話し合うってのもなんだし、とりあえず行こうぜ」
「誰のせいよ誰の……」
「九条だろ」
「武藤でしょ！？」
本調子、かどうかは分からないが、多少テンションの上がった奈々子を連れ、力也とレナは歩き出した。
保護とはいっても、実際に個能省に連れて行って保護するわけではない。力也とレナが付き添うというだけだ。
その間に、犯人がエサに食いつけばよし、駄目ならば、
「どうすっかなぁ」
「なにが？」
「うんや、なんでもない」
軽く、しかし真面目に考えつつ、力也は二人を先導した。

最高の気分だった。男は、今まで封じられていた自分の力を振るうたびに、喜びに震えていた。
獲物はなんでもよかった。犬でも猫でも、しかし、昨晩、人間に出会えたのは幸運だったと思う。
思うがままに力を使った。男の能力は、触れたものを全て切裂く力。今でも、獲物の断末魔は耳に残っている。だがそれは、人を殺したことではなく、自分の力の証明のようなものだった。
嬉しかった。今まで、なぜこれほど素晴らしい力を封じられていたのだろうか。どうして、人類はこんなにも素晴らしい力を封じてしまっているのだろうか。

男には、もはや理解できない。力を使う喜びを覚えてしまった以上、今までの生活には戻れそうに無い。
これからも存分に能力を使うつもりだったが、誤算があった。夕べ殺した獲物、あまりにも解体に熱中するあまり、何時間も何時間もかけてしまった。
気がつけば、夜も明けようかという時間帯だった。誰かに見られ、悲鳴を上げられてしまったのは明らかな失敗だ。
幸い、相手はこちらに気づいていないようだったが、油断はできない。すぐに隠れたが、警察がやってきたので逃げてしまった。
もしかすると、自分の顔がばれてやいないだろうか。途端に、男は不安にかられてしまった。
家に帰り、血で汚れた服を着替えて、すぐに警察署付近に張り込んだ。
警察は、自分が切り刻んだ獲物にばかり気を取られていたらしく、男のことはばれていなかった。が、さらに厄介なことになってしまった。
首輪付き、個能省の狗たちがやってきてしまったのだ。
少年と少女、男よりも一回り年下だろう二人は、すぐに一人の少女を連れて警察署から出てきた。間違いなく、あれが第一発見者だろう。
しばらく、何やら言い合っていた。すぐにでも飛び掛り、切り刻みたかったが、男は我慢した。さすがに、警察署の目の前で能力を使うわけにもいかない。それに、首輪付きもいる。
二人相手でも、負けるつもりは男には無かった。むしろ、狗二匹を解体する自分を思い浮かべて武者震いしたほどだ。
やがて歩き出した三人を、男は尾行した。
チャンスがあれば、いつでもその首を、腕を、足をバラバラに引き裂いてやるために。

## 第一話　4

力也たちは、結局適当に街をぶらついているだけだった。
店に入るにしても、敵がいつやってくるともわからない。それに、正直、遊びから離れて久しい力也やレナには、どこに寄っていのかも分からなかった。
奈々子も、自分の立場を理解しているのかぶらつくことには何も言ってこなかった。が、どうにも力也との話がハマったらしく、
「いやいやまさか、あっはっは」
「だからアンタは！？」
こんな感じで、ずっとやりとりが続いている。
不安の裏返しだろうか。力也は周囲に気をつけつつも、奈々子の話しにずっと付き合っていた。
第一発見者とはいえ、奈々子は本当に何も見ていないらしい。再三、本人も言っている。あとは犯人が奈々子を見ているかだが、先ほど上司からかかってきた電話からすると、それなりに可能性はありそうだ。
犯行時刻が夜中の一時から三時。奈々子が被害者を発見したのが六時過ぎ。が、警察の鑑識曰く、殺されたのは一時から三時の間でも、それ以降も解体作業が続けられていたらしい。
胸糞悪い話だが、犯人が奈々子の上げた悲鳴に気づき、やめたという可能性もある。もしそれで奈々子の顔がばれているなら、力也としてはありがたい。
もとより、捜査だのなんだのは苦手だ。足と拳で稼いできた星の方が多い。レナも似たようなものだ。どちらも、荒事に長けた能力持ちなのである。
これでどちらかが捜査向きの能力でも持っていればバランスが良かったのだが、日本の能力者事情は色々と厳しい。理想はあくまでも理想止まりなのである。

二人組みでやれるだけありがたい。一人では往々にして対処できないことの方が多い。特に周囲の安全を考えればなおさらだ。
昨日の発火能力者にしても、一歩間違えば大惨事である。いつも、仕事終わりの力也の拳は汗で濡れている。油断などできない。緊張しっぱなしだ。
力也がこの仕事について、早数年。未だに、能力者同士の戦いに慣れる気がしない。
自分一人ならば気楽でいいが、他を守るとなると、骨が折れる。気を配るだけでも、精神が磨り減っていく。
レナはあれで一応、能力を認められており、対策官としての実力もある。余談として上司の娘でもあるが、それはともかく。
力也の負担を、レナも背負ってくれている。それが、力也の励みともなる。
何だかんだでありがたい相棒は、やはりぼんやりとした視線を前方へぶん投げていた。何を見ているものやら計り知れない。
しかして、背後から感じる殺気に、気づいてないわけでもあるまい。
警察署を出てから、すぐさまぬめるような殺気が力也たちに絡み付いてきた。
昼間、街中とあって、人通りは多い。下手に仕掛ければ、新たな犠牲が出てしまう。
どこか人の少ない場所をと考えるも、相手の出方が分からぬ以上、無茶はできない。
単純に路地裏に誘い込めばいいというものでもあるまい。首輪の存在は良くも悪くも相手に知れる。警戒され、逃げられればおしまいだ。
殺気の具合からして、こちらをうかがう、というよりは襲い掛かる機を狙っているようでもあるが、力に溺れた人間というのは、どう動くか想像もつかない。
慎重に足を運びつつ、力也は奈々子との会話を続けていた。

「特別クラスにいるの、貴方たちだったのね……」
奈々子が言うのは、学校の話だ。
力也とレナは、仕事がらまともに授業を受けられない。そのため、特別なクラスを編成して貰い、そこに所属している。
所属といっても、学校に通えるのは一年に何日ともないだろう。実際、昨年は合計で一ヶ月も通っていなかった気がする。
あくまでも、学生という特権身分と、卒業のための手配をしてもらうための、上司たちの配慮だ。どうせ大学なども通えぬし、そもそも永久就職先も決まっている。
個人能力対策省に入ることは、イコール、その後の人生も決まってしまうことだ。
一応、能力を再封印して辞めるという規則もあるらしいが、今のところ一人もそれを適用した者はいないらしい。勤め上げたからではない。多くは、事件の最中に命を失うからだ。
力也は、その全ての事情を承知した上で個能省に入っている。自分の命についても頓着はしていない。個人的な理由もある。
「あれっ、でも、特別クラスには三人いるって聞いたような……」
奈々子が言っているのは、もう一人のクラスメイトにして同僚のことだろう。
もう一人いる特別クラス要員は、力也とレナ以上に忙しい。
能力の発動を感じ取れるというクラスメイトは、ほぼ個能省につめっきりだ。力也たち以上に学校にこられていない。
さすがにそのあたりの事情を話すわけにもいかず、力也は茶を濁した。奈々子も、それとなく察してくれたようだった。
「それで、どこに行こうとしているの？」
しかして、聞かれた問いにはなんとも答えづらかった。
なにせ、目的は無く、奈々子をエサにして獲物を待っているだけなのだから。
馬鹿正直に言うわけにもいかず、
「上からの連絡待ち」

とは言ってあるが、さすがに厳しくなってきた。もうこれで五回くらい聞かれている。
奈々子の顔にも、不信の色が浮かび始めた。
「そろそろ昼飯時だなぁ。何を食べようか」
昼にかかる時間帯だったので、食事ネタで誤魔化した。
「せっかく天気がいいんだし、何かテイクアウトで外で食べましょうか」
奈々子も提案に乗ってくれた。レナは相変わらずどうでもいい発言である。
丁度、ファーストフードの店があったので、そこでテイクアウトした。食べる場所はほどなくして見つかった。公園である。
公園と言っても、それほど大きな場所ではない。児童公園、というのがせいぜいのこじんまりとした場所だ。
昼時だけあって、人は少ない。子供たちは一斉にはけているらしい。まばらに人がいるくらいだ。
だからだろうか、背中に感じる殺気が、いままでで一番ねばっこく絡みつくようになった。
そろそろ仕掛けてくる頃合だろうか。
力也がそう感じていると、敵は、考えどおりに飛び出してきた。

チャンスだ、と男は思った。
周りに人はいない。それでいて、獲物の三人は平然と昼食を広げ始めた。
こちらに気づいている様子はない。やるなら今だ。
なぁに、昼時だといっても、さっくりやってしまえば問題ない。昨晩のように時間をかけるつもりはない。今回は、目的だけ果たして、すぐに逃げるつもりだった。

個能省の連中をやったとなれば、箔がつく。この力を与えてくれた者にも自慢できよう。
男は、考えるやいなや、ベンチに腰掛ける三人に踊りかかかった。
右手で少年の首をなぎ、返す刃で金髪の少女の首をなぐ。個能省の連中さえやってしまえば、あとは赤子の手を捻るようなものだ。殺すのは容易い。
男は右腕を振上げ、携帯電話でなにやら話している少年に襲い掛かり、
「そろそろ来る頃合だと思ってたわ」
少年の、手袋をはめた拳に、防がれた。
ぎり、と耳障りな音が響く。男がいくら力を込めても、少年の拳を切裂けない。手袋が特殊なのか、少年の能力か。
まずい、と思った頃には、手を取られていた。そのまま力任せにぶん投げられる。背中を打ち、息が詰まった。
慌てて起き上がってみると、悠然とした少年がまず目に映った。こちらを全く恐怖せず、むしろ侮蔑しているとも感じられる。
一気に男の頭に血が上った。自分の、この素晴らしい力を侮辱するなど許せない。
再度、男が飛び掛る。少年はボクシングのような構えを見せ、
「ふっ」
と、拳を放ってきた。
なんでもない一撃のように見えたが、少年の拳は男の両腕をすり抜け、男の鼻を打った。見た目にそぐわに威力に、男はたたらを踏む。
金髪の少女も、怯えた様子は無い。唯一そんな様子を見せる黒髪の少女は、少年の背後に隠れた。
誤算だった。自分の能力が効かない相手がいるなんて。
状況が不利とみると、男は逃げ出した。しかし、少年は難なく追いついてみせ、男の腕を取ると、一気に後ろでに持ち込み、絞り上げた。

関節が、曲がらぬ方向へと無理矢理曲げられる。ミシリ、という音が聞こえ、すぐさま枯れ枝を折るような音が聞こえてきた。
激痛が送れてやってくる。それでも少年は構わず、もう一本の腕も、ためらいもせずに折ってくれた。
「ぐ、ぎっ」
完全に読み違えた。少年たちは、とうの昔にこちらに気づいていたのだ。気づいていた、あえて泳がせていたに違いない。
地に付し、それでもなんとか逃げようとすると、目の前の地面が爆ぜた。
見やれば、金髪の少女が、銃の形に指を突き出している。逃げれば次は無いと、無感情な瞳が告げていた。
「国際法じゃ、能力の違法仕様者は問答無用で死刑になる。それは、ここでやってもいいんだぜ？」
耳打ちするように言われた言葉が、男の体から力を奪い去った。
迂闊だった。溺れすぎていた。自分の力が万能だと信じ込んでいた。
個能省の狗、日本で二十人というエリートは、決して馬鹿にできるものではなかったのだ。今になって、男は後悔し始めた。
「す、すごいのね、あんたたち……」
他人事のようにいう、黒髪の少女が忌々しい。彼女さえいなければ、自分はこのような状態に陥らなかったものを。
「うがぁっ！」
男はもがき、立ち上がると、黒髪の少女目掛けて突っ込んだ。
腕は折られている。しかし、振り回せば相手に当たるかもしれない。
痛みを堪え、しかし、
「無駄な足掻きをするんじゃねぇっての」
あっさりと少年の腕に防がれた。
「な、なんで……」
「てめぇみたいなのに対抗するためだよ。個能省、研究開発課の特

殊素材をなめんじゃねぇっての」
男の腕は、少年のガクランの腕を、確かに上からないでいた。しかし、軽く火花が散った程度で、両断せしめることはできなかった。
腕の痛みも忘れ、男は愕然となる。しかしすぐに、少年の蹴りがアゴを打ちぬき、男の意識は暗転した。

## 第一話　5

「ふぅ、一件落着っと」
男の腕に腕輪をはめつつ、力也は吐息した。
「だ、大丈夫、なの？」
「あぁ、腕輪をはめたから、もう心配いらないよ」
「そ、そうじゃなくて、あんたの腕！」
「あぁ……」
言われ、袖をまくってみると、三筋ほど赤い線が走っていた。
研究開発化の力量は大したものだ。人間を細切れにするほどの威力を、この程度に納めてくれたのだから。
「力也……」
「心配すんなって、レナ。これくらいどうってことないぜ？」
レナが非難がましい視線を寄せる。おそらく、無茶したことを怒っているのだろう。
奈々子にいたっては、
「ばかっ！」
とわざわざハンカチを取り出し、力也の傷を拭ってくれた。
「あいててて」
「そんなに傷は深くないみたいだけど、すぐに手当て受けるのよ？そういうの、できる人いるんでしょ？」
「まぁ、一応」
「じゃあ、早くいかないと……」
「まぁ、回収班がくるまでは現状待機だな」
「そんな……」
「大丈夫だって、そんなに傷は深くないんだろ？」
「でも……」
血で汚れてしまったハンカチを握り締めながら、奈々子は俯いた。
それに心配ないと覆いかぶせるように、力也は笑う。

「まぁ、これくらいの怪我、慣れたもんだよ。心配してくれてありがとな」
「そ、そりゃ、助けてもらったんだし、心配くらいは」
もにゅもにゅ言い始めた奈々子。力也はそれに笑みを向けつつ、電話を取った。
リダイヤルすると、相手はまたも一コールで出た。
『東郷だ』
「武藤っす。切裂き魔の事件、完了しました。目標は確保済みです」
『了解だ。被害は』
「俺の右腕が女の子泣かせたくらいっすかね」
『分かった。医療班も送ろう』
電話はいつものごとく、すぐに切れた。
「だ、誰が泣いたっていうのよ！」
「いや、そう言うと格好いいかなって」
「ばかっ！」
実は本当に泣きかけていた奈々子だったが、力也の一言で涙も引っ込んだらしい。レナも、その様子を見て安心したようだ。
「ま、とりあえず、一件落着ってことで」
気楽に言うと、少女二人はやっと表情を緩ませてくれた。

回収班に後を頼むと、その場は解散となった。力也の怪我も、たいしたことなかったようで包帯を巻かれた程度ですんだ。
奈々子は事情聴取のために回収班に連れられていったが、終始、力也の怪我を気にしているようだった。なので、右手をぷらぷらと振ってみせ、無事をアピールした。
それで奈々子も安心したらしく、大人しく回収班につれられていった。
力也たちは別行動だ。一件の報告をするために、個能省へと赴か

なければならない。
個能省は、永田町、ではなく少し外れた場所にある。そこまではタクシーを使った。
運転手は学生服の二人に一瞬顔をしかめたものの、首輪を見ると、すぐさま車を発進させた。首輪は、事情の説明を省いてくれるので便利である。
個能省に着くと、力也とレナは、まず室長室へと向かった。
重苦しい扉を叩き、入る。
いるのは初老の紳士、個人能力対策省の長、東郷三郎だ。
レナの父とはいえ、義父の関係なので、東郷自身は日本人である。微かに白髪の混じった頭をオールバックでかため、厳しい視線を二人によこした。
もっとも、視線の厳しさはいつものことなので、さすがに二人も慣れている。
「ご苦労だった、二人とも」
「運が良かったですよ。あっちから出てきてくれましたから」
「怪我は大丈夫なのかね？」
「えぇ、かすり傷です」
話すのは、専ら力也だ。簡単に報告を終えると、二人は一番の難関、書類作成に取り掛かった。
事件の概要を報告するものだが、力也としては学校の宿題並みに面倒な代物である。
さらさらと書いているレナの内容を、ちらちらと盗み見ながら、なんとか仕上げた。提出すると苦笑されたが、そこはご愛嬌だと思って許してもらいたい。
書類の作成が終わると、二人ともに、帰宅を許された。連日の仕事で疲れているだろうという東郷の判断だ。ありがたい。
レナは東郷と話があるそうなので、その場で別れた。力也はそのまま帰路に着く。
家までは、そう遠くない。個能省職員用の、特別なマンションが

すぐ近くにあるのだ。
警備員と管理人、さらには他防犯設備による万全の警備体制。転じて監視状態を気にすることなく潜り抜け、家に入る。
ちょうど、力也の弟も帰ってきていたようだ。力也が家に入ると、とことことやってきた。
「お帰り、お兄ちゃん！」
武藤静馬、小学校の六年生である。さらに、
「あぁ、おかえり、力也」
父、原也までやってきた。
「おう、ただいま」
弟の頭をなでてやりつつ、力也は父に声をかける。
「調子、どうだよ」
「ああ、今日はそんなに悪くない。昼食も作ったが、食べるか？」
「あ、んじゃもらおうかな」
父、原也は力也が個能省に身を投じた理由の一つでもある。
先天的無能力症候群と呼ばれる病にかかっているのだ。誰しもが持っているはずの特殊能力を持たずに生まれてきた人間である。
一応、他との区別をなくすために腕輪はしているが、はずしてもなにもできない。そればかりか、この病にかかっている人間は、生まれつき体が弱い。
父もその例にもれず、体調を崩しやすい。そのため、長男である力也が、さきに働きに出ているのだ。
個能省に勤めていれば、マンションの家賃はタダ。しかも、対策官が万が一死亡した場合でも、家族の一生は補償される。
力也にとっては、願ったり叶ったりの職場だ。誘われた時は、一にも二にもなく、参加を承諾した。
父の作ってくれた食事を取り、力也は自室へと戻った。
さすがに疲れが酷い。特殊能力を使えるとはいえ、やはり体への負担は大きい。
風呂にも入りたかったが、力也の体はそれよりも睡眠を欲した。

目を閉じると、すぐさま眠りにつけた。
どうせまたすぐ呼び出されるんだろうと覚悟しつつ、しばしの安らぎに、力也は身をゆだねた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6182y/

Ｐ＆Ｐ（改訂版）

2011年11月20日18時38分発行